

ひきこもり及び不就労群のライフイベントとレジリエンスの関連に関する研究 大場義貴^{*,1)}、武井教使²⁾、土屋賢治²⁾、佐々木正和¹⁾、二宮貴至³⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾子どものこころの発達研究センター(浜松医科大学)、

³⁾浜松市精神保健福祉センター

目的：ひきこもりの生育歴に関する研究は、国内では森、鏡らが、ひきこもり群 41 名、対照群 172 名に対し調査を行い、保育園の通園経験無し、小中時代の早い就寝時間、不規則な食生活リズム、遊びの過少、手伝いの少なさなどに有意に差があると指摘した(森、鏡ら 2007)。しかし、これ以外の生育歴に関しては明らかになっておらず、ひきこもりの定義も研究者によって異なっている。本研究では、浜松市の若者(19 歳～39 歳 857 人)を対象に、正規雇用、非正規雇用、学生、主婦、6 ヶ月以上無業求職訓練有、6 ヶ月以上無業求職訓練無を独立変数(以下各群)、ライフイベント(①17 歳までの逆境体験、②昨年度のストレス状況)、昨年度の自殺関連行動、レジリエンス得点を従属変数(以下調査項目)として関連を調査する。

方法：調査は、既に確保できている 857 人に対し、郵送による自記式調査により行った。回答は Web でも受け付けた。2016 年 1 年間の就労状況等、ライフイベントは、藤原ら(2004)の、「子ども時代の逆境体験」により、回答者の 17 歳以前について、親の死親、離婚、その他の親との接触の喪失、親の精神病物質乱用、親の犯罪行為、家族からの暴力・身体的虐待・性的虐待・ネグレクト、自分自身の重大な身体的病気、経済的困難の 12 問の回答を求めた(2 件法)。また、2016 年 1 年間の経験について「社会的再適応評価尺度」(Holmes,T ら,1967)の回答(2 件法)を、八尋によって標準化された新 LCU(1993)により重み付し得点化した。自殺関連行動は、無 0、念慮 1、自傷 2、計画 3 と重み付し得点化した。レジリエンスは、Ego-Resiliency 尺度(ER89)日本語版(畑ら 2013)の回答(4 件法)を得点化した。解析は spssVer.22.0 を使用した。

結果：1) 857 人に郵送し、宛所無し 11 人、786 人から有効回答を得た(92.9%)

2) 性別と、年齢・17 歳までの逆境体験・昨年度のストレス状況・昨年度の自殺関連行動・レジリエンス得点間には、有意差は無かった(t 検定・u 検定)。

3) 各群と調査項目の関連は以下の通りであった(one way ANOVA)。①17 歳までの逆境体験では、正規雇用と無業求職訓練無($p=.033$)、学生と主婦($p=.008$)、主婦と無業求職訓練無($p=.003$)間で有意差があった。②昨年度のストレス状況では、学生と主婦間で有意差($p=.012$)があった。③昨年度の自殺関連行動では、正規雇用と無業求職訓練無($p=.000$)、主婦と無業求職訓練無($p=.014$)間で有意差があった。④レジリエンス得点では各群間には有意差は無かった。

考察：6 ヶ月以上無業求職訓練無を「ひきこもり群」と仮定義すると、逆境体験、自殺関連行動で、正規雇用群との間に有意差がある。社会不適応状態の長期化、自殺のハイリスク群としても捉えることが出来、早急な支援体制の充実が望まれる。また、主婦群の中に主な日中活動が DVD やゲームの群や、非正規雇用群の中に身体疾患等で通院はしているものの他の日中活動が乏しい者がいるため、「ひきこもり亜群」として更なる分析が必要である。

結論：収集済みの 2016 年 1 月のデータ Time1 と 1 年後の今回のデータ Time2 を接合させた上で、居住地、性別、年齢をマッチングさせた症例対照研究法を用いて、Time1 以前の不登校経験、傷病経験等(exposure)と Time1 - Time2 の各群間の動き(outcome)を分析する(線形重回帰分析等)。

* 発表計画：2018 年 3 月開催の第 37 回日本社会精神医学会にて発表予定